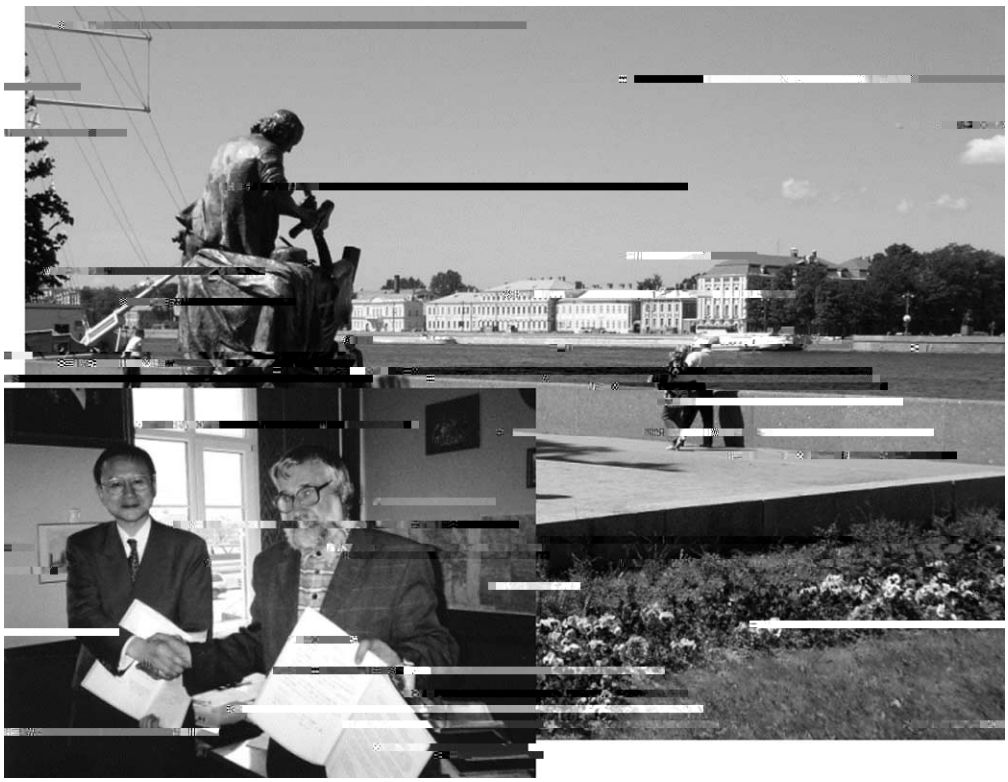
00_.　.
東京大学広報委員会

ロシア・サンクトペテルブルグ国立大学へ『大日本史料』など史料集750冊を寄贈する



サンクトペテルブルグ国立大学（手前はネヴァ川）と史料集寄贈に関する交換（史料編さん所長石上英一教授と東洋学部長ステブリン＝カメンスキー教授）　（史料編さん所）

（29ページに関連記事）

目　次

一般ニュース …… 2
東京大学学生表彰「東京大学総長賞」の推薦受付について、平成14年度学部卒業者及び大学院修了者（修士課程・博士課程）の就職状況、学生のアルバイト及びアパート・下宿等の紹介状況、事務職員海外研修報告
部局ニュース …… 29
大学院人文社会系研究科・文学部で外国人留学生等との懇親会開かれる、ハワード・ガードナー教授講演会、日本史の基幹史料集750冊をロシアへ寄贈する
掲示板 …… 30
平成16年度東京大学学術研究奨励資金による国際交流助成事業募集について、第20回理学系研究科技術シンポジウム、「教養学部報」第467（７月２日）号の発行、医科学研究所「オープンキャンパス」開催、地震研究所「一般公開と公開講義」開催、総合研究博物館特別展示「東京大学学位記」展－博士研究にふれる－
事務連絡（人事異動（教官、事務官））… 34
訃報（金澤武名誉教授）…… 35
淡青評論「駒場と本郷」…… 36

東京大学学生表彰「東京大学総長賞」の推薦受付について

本学の学生を対象として、学業、課外活動、各種社会活動、大学間の国際交流等の各分野において、「優れた評価を受けた」「優秀な成績を収めた」「本学の名誉を高めた」などの顕著な功績のあった個人又は団体に、総長が表彰を行う「東京大学総長賞」が平成14年度から設けられている。

この表彰は、本学教職員・学生からの推薦に基づき、「東京大学学生表彰選考委員会」（以下「選考委員会」という。）が選考にあたり総長が表彰するものである。

推薦にあたっては、個人・団体ともに随時受付けることとしており、別記様式１・２による候補者推薦書（別記様式１・２は、東京大学ホームページをご覧ください。）を学生部学生課教養掛（内線22529）まで提出することとしている。

選考委員会では、推薦された候補者の中からその内容を審査のうえ、「東京大学総長賞」として相応しいものを決定する。

表彰は、原則として９月（秋）及び３月（春）の年２回実施することとしており、このたび、平成15年度の推薦基準が以下のとおりまとめられ、推薦の受付を行っている。

今年度第１回表彰の授与式は、９月30日（火）に農学生命科学研究科弥生講堂で行うことを予定しており、第１回の推薦締切りは９月４日（木）とする。

なお、第２回表彰は平成16停ß用嶌月末ゐの授予襪帛歟髫冤侈諢苒研稂巓親殺土拈癬　鷲翌澪苜済済ｅ押嶮昙引ｉ囎バ胞簇ｷﾂ奮輯日程の詳細は未定であり、決まり次第再びお知らせする。

〔参考〕

平成14年度学部卒業者及び大学院修了者（修士課程･博士課程）の就職状況

平成14年度の学部卒業者及び大学院修了者の就職状況集計結果及び概況は次のとおりです。（調査基準日は平成15年５月１日現在）

１．平成14

№1267 2003. 7. 9

平成14年度 学部別卒業者の就職状況

[平成15年5月1日現在]

[単位 ： 人]

修士-表1

平成 14年度　大学院(修士課程)研究科別修了者の就職状況

[平成15年5月1日現在]

[単位 : 人]

2003. 7. 9 №1267

[単位 ： 人]

学部-表2

平成 14年度　学部卒業者の産業別就職状況

［平成15年5月1日現在］

修士-表2

[単位：人]

博士-表2

平成 14年度　博士課程修了者の産業別就職状況

[平成15年5月1日現在]

[単位：人]

研究科別	人文社会	[illegible]	法学政治	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	農学生命科学	医学系	[illegible]	[illegible]	新領域創	[illegible]	[illegible]

学部-表3

平成　14年度　学部卒業者の企業規模別就職状況

［平成15年5月1日現在］
［単位：人］

修士-表3

平成 14年度　修士課程修了者の企業規模別就職状況

[平成15年5月1日現在]

[単位 : 人]

[redacted]

博士-表3

平成 14年度　博士課程修了者の企業規模別就職状況

［平成15年5月1日現在］

［単位：人］

研究科別	人文社会	教育学	法学政治	経済学	総合文化	理学系	工学系	農学生命科学	医学系	薬学系	数理科学	新領域創	合　計

就職状況の推移(学部学生)

就職状況の推移(学部学生)

2.産業別就職状況の推移・全産業別(過去5年)

	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度
農・林・漁・水産業	1	0	0	0	4
鉱業	6	2	0	1	3
建設業	18	16	16	11	11
*製造業 計	353	265	248	266	212
*卸売・小売 計	71	42	33	44	37

就職状況の推移(大学院修士課程)

1.課程修了者数等及び割合(過去10年)

就職状況の推移(大学院修士課程)

2.産業別就職状況の推移・全産業別(過去5年)

	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度
農・林・漁・水産業	0	1	0	0	0
鉱業	5	6	2	1	1
建設業	48	38	60	40	49
*製造業 計	547	523	606	595	599
*卸売・小売 計	14	10	20	22	21
*金融・保険・不動産 計	62	71	70	79	86
*運輸・通信・電気・ガス・水道 計	113	127	102	132	225
サービス業	83	95	151	120	173
教育	20	16	10	21	21
公務	92	84	109	86	118
公共企業体	2	12	6	27	1
その他	45	57	67	90	74

就職状況の推移(大学院博士課程)

2.産業別就職状況の推移・全産業別(過去5年)

学生のアルバイト及びアパート・下宿等の紹介状況

学生部厚生課では、本郷地区に在学している学部学生、大学院生、留学生及び研究生に対して、アルバイト及びアパート・下宿等の紹介を行っており、その状況は以下のとおりである。

４．紹介希望者別内訳

区　分	紹介件数	成立件数
学部学生	327	67
大学院生	355	70
研究生	0	0
上記以外	0	0
合　　計	682	137

５．成立物件の間取り別順位

順　　位	間取り、設備等	件　数
1	1～2部屋、台所、バス、トイレ	59
2	1～2部屋、台所、トイレ	57
3	ワンルームマンション形式	9
4	1～2部屋、台所（専用）	7
5	1部屋（他の設備は共用）	5
合　　計		137

６．成立物件の地区別順位

順　　位	地　　区　　別	件　数
1	文京区	92
2	北区	15
3	足立区	10
4	豊島区	7
5	練馬区	4
	葛飾区	2
	その他	7
合　　計		137

＜アパート・下宿等の紹介について＞

１．学生部センター（安田講堂北側１階）内にアパート・下宿等紹介の掲示板があります。希望する物件がありましたら「学生証」を持参のうえ、学生生活掛（窓口３）に申し出てください。紹介状を発行いたします。
２．紹介手続き後は家主に直接連絡し、紹介物件の下見をした上で、家主と話し合って決めてください。
３．結果については、成立・不成立にかかわらず、紹介後１週間以内に学生生活掛（窓口３）まで必ず報告してください。

（学生部）

事務職員海外研修報告

本学では、全学協力基金により国際交流に熱意のある事務職員を長期間海外に派遣する研修制度をもっているが、平成14年にこのプログラムで派遣した３名から研修についての報告書が提出されたので供覧するとともに、今後、当制度での海外研修を目指す人々の参考としたい。

在外研修（長期）を終えて

教養学部等教務課前期課程第二掛
延　原　和　志
（カリフォルニア大学デイヴィス校）

１．はじめに

私は、「東京大学国際交流担当職員在外研修（長期）」のため2002年３月25日から2003年３月21日までの約１年間米国カリフォルニア州デイヴィスに滞在する機会をいただきました。研修内容は１年間にわたる語学研修（実務研修期間中は１日に１コマの授業のみ）と最後の３ヶ月間の実務研修で構成されていました。以下、その内容と私なりに感じたことを報告したいと思います。

２．デイヴィス

デイヴィスはカリフォルニア州の北部にあり、州都であるサクラメントから西に車で約30分、サンフランシスコへも１時間半程度で行くことができる郊外の小さな大学町である。人口は約６万人程度で、カリフォルニア大学デイヴィス校（以下UCD）の構内を含め、街には高い建物がほとんど無く、広々として落ち着いた雰囲気だった。カリフォルニアというイメージから渡米前は温暖で穏やかな気候を予想していたが、実際は、夏は雨がほとんど無く乾燥していて気温も40度を越える日もあり、逆に冬は雨が多く太陽が恋しくなるほどで極端な気候だった。しかし夏でも夜は涼しく、冬も東京の寒さに比べれば暖かったため今にして思えば居心地が良かった気がする。

アメリカは車社会だとは聞いていたが、実際デイヴィスの町には公共交通機関はバスしかなく、学生は大半が自転車かバスで通学していた。私も１年間ずっと天候に関係なく自転車で通ったが、これほど自転車が街中を行き交っている町はあちらでは珍しいということだった。そんな町に住んでいても遠くに出かけるには車が無いと非常に不便で、やはり車社会というのは本当であった。街の中心街はとても小さいが、その他に大小のモールが点在しているので、普段の買い物には困らなかった。ただ娯楽施設はあまり無いため、退屈なつまらない街だと感じている学生も多いようだった。治安は大変よく、主な犯罪は自転車泥棒ぐらいで、夜に女性が一人でジョギングをしているのを見て大変驚いたこともあった。また想像以上にアジア系米国人が多く、UCDの学生構成も

最近は白人系を抜いてアジア系が多くなったということで、キャンパス内でも街中でも自分が外国人であるという事を意識することは少なかった。とても落ち着いた環境で、勉強をするには恵まれた環境だという私の第一印象は１年間を通して変わることは無かった。

私は大学から15分くらいのところでホームステイをした。ホストマザーは一人暮らしの78歳の女性で、数年前から留学生を受け入れ始めたらしく、特に日本人はこれまでに何人も滞在したということであった。高齢なので家事を手伝ってほしいという意味もあって留学生を受け入れているようだったが、私も気持ち良く滞在したかったので積極的に手伝い、自分の身の回りのことは自分でやるようにしていた。家には少し意外だったのだが白米やしょうゆなども置いてあり、比較的日本の食事に近いものを提供してくださったのでありがたかった。食事の時間は貴重な会話の時間なのでなるべく喋るようにしていたが、毎日二人きりだと話題も少なくなり、何を話そうか困る日々が続いたこともあった。とても信仰心の厚い方で日本の宗教や私自身の宗教観の話になることもあったが、英語力の問題や自分自身の宗教に対する関心の薄さもあり言葉に窮することもしばしばだった。

ただ、家族や友人との会合によく誘ってくださったので、学校の宿題等で忙しくない限りなるべく参加するようにした。初めのうちはネイティブスピーカー同士の会話はほとんど聞き取れず、疎外感を感じることも多かったが、親戚同士のパーティやお孫さんの学校行事、教会の日曜礼拝等アメリカ人の生活を垣間見ることができ、貴重な機会であったと思う。

３．語学研修

到着直後の３月28日から今年の３月14日まで４学期に渡り、UCD附属のUCDエクステンションセンターで英語語学プログラムを受講した。最後の学期は実務研修もあったため、１日１コマの授業だけであったが、最初の３学期間は毎日４～５コマの授業を受けていた。授業内容は、発音練習やリスニング、文法、英作文と言った一般的なものから、アメリカンスラング・イディオムの授業、PowerPointを使ってプレゼンテーションのスキルを学ぶ授業等様々であった。

その中で一番印象に残っている授業は、アメリカ現代社会の様々な問題について討論する授業である。この授業は、人種、性、貧困、学校教育、家族等々米国が抱える様々な社会問題について書かれた教科書を使い討論をするという授業だった。毎日読書の宿題が出て、その内容について次の日に討論をするのだが、UCDの正規の大学生が使う教科書と同じものを使っているため内容も難しく、平均10数ページもあるため、初めのうちはこの授業の宿題だけでかなりの時間を費やした。しかも辞書を一切使うなと言われているため、内容が良くわからないまま討論に臨むということも初めは多かった。討論中は、先生が「それは何故？」「どういう方法で？」というようにかなり突っ込んだ質問をしてくるので、それに対して即座にきちんとまとまった意見を言わなければならず、授業中は緊張の連続だった。昔から日本の教育は知識偏重で、「なぜ？」「どうして？」という自分の頭で考えさせる力が伸びないと言われるが、その当否はともかく、少なくとも自分自身の学生生活を振り返るとやはりそうだったのかなと改めて感じた。（実際、日本語でもその質問には即座に返答できないと思うことが度々あった。）また、私も含め全般的に日本の学生はなかなか自分から発言せず、発言も発音や文法を気にしながらたどたどしく話すのだが、南米や中東などからの学生は文法や発音などは気にせず、時には内容的にも少しずれているのではと思うことまで、とにかく単語を並べてぺらぺらと話すのは印象的だった。彼らの母国語と英語とが比較的似ているためだとか、文化の違いだと言ってしまえばそれまでかもしれないが、外国語を習得する際には

るという事を繰り返しているようである。いかに効率よく良い仕事ができるかという事を常に考えていて、とてもいい環境だと思った。他に、実務研修が始まって間もなく北カリフォルニアのUC各校（Davis, Berkeley, Santa Cruzの３校）のEAPのスタッフが集まって情報交換や問題点等を話し合う会議がバークレー校で行われ、私も出席させていただいた。学生数が増えている一方でEAPの予算は削られているという現状にどのように対処していけばよいのかという問題から、各校がオンラインでの申し込みをどのように行っているか、オフィスのホームページをどのように管理・運営しているかといった問題、UOEAPとの連携のあり方等々、議題も幅広く率直な意見交換が行われていた。印象的だったのは、同じEAPのオフィスとはいえ各校のオフィスの運営（例えばアルバイトの使い方、ホームページの内容、面会に来る大量の学生の裁き方等々）はかなり異なるようで、他のオフィスがどのように仕事をしているかについて各々が非常に関心を持っていることだ。他のオフィスが採用している方法が良いと思ったら、それを自分達のオフィスにも積極的に導入しようという姿勢に感銘を受けた。

５．終わりに

旅行以外の目的で海外に行くことはもちろん、１年間という長期に渡って日本を離れて生活するという経験は今回が初めてであった。研修全般を通して言えば、アメリカ人だけでなく様々な国の人達と知り合えたことが私にとって貴重な財産となったと思う。出身国によって様々な英語（の訛り）があり、様々な考え方や生き方があるということは頭ではわかっているつもりだったが、それを肌で感じられることができたのは自分にとって非常に良い経験であった。渡米前は米国に行くということで米国人との交流だけを漠然とイメージしていたのだが、実際に友人になったのは他国からの留学生の方が米

クラスです。

「Listening to The News」は、週２回当日の朝録画したＢＢＣニュースを見ながら先生の解説を聞いて、ニュース英語に親しみリスニングを強化するというものでした。録画したニュースから先生が書き起こしたニュースの原稿が配られ、一回目はなるべくそれを見ずに内容を把握し、その後留学生にとって難しいと思われる単語や言い回しの解説がされた後２回目を見る、という具合に進められていました。私のいた時期はイラク関連のニュースが頻繁に流れていましたので、国際政治や戦争に関する単語もよく取り上げられました。ユーモアやジェ

英国での研修を終えて

理学系研究科等生物科学専攻図書室
山　谷　弘　美
（ウォーリック大学）

私は本学の国際交流担当職員在外研修のため、平成14年９月27日から平成15年３月23日までもう一名の派遣者とともに英国ウォーリック大学に滞在した。ウォーリック大学は1965年に創立された比較的新しい大学で、ロンドンから列車で1.5時間ほどの中部イングランドの産業都市コヴェントリーの郊外にある。大学の南方には古くは温泉地であったロイヤル・レミントン・スパー市があり、大学キャンパスまではいずれの市からもバスで30分くらい、周囲には緑豊かなのどかな風景が広がるところである。

私達は大学のCELTE（Center for English Language Teacher Education）というデパートメントが主催する集中英語コースに２学期間参加して語学研修を行った。この集中英語コースにはアカデミッククラスとビジネスクラスの２クラスがあり、コースの目的として英国の大学院で勉強するために十分な英語力、職業上で使える十分な英語力を修得するという２つの柱が掲げられている。入学者は主に英国大学院進学希望者や経営学修士号（MBA）取得を目指す留学生である。昨年度は１クラスの人数は約10名で、私達は後者のビジネスクラスで中国、台湾、クウェート、リビア、タイ、韓国、ベネズエラ人のクラスメート等と共に勉強した。学習効果を上げるためのカリキュラムは文法、ライティング、リスニング、スピーキング、リーディング、スタディスキル等の科目から総合的に構成された週24時間のフルタイムクラスだった。毎日の授業の他に宿題と自習が重要とされ、学習量はとても多かったが、国際的な環境で英国人講師から英語を学ぶのはとても楽しかった。英語コースの事務担当者も留学生に対して親身に世話をしてくれた。グループによる授業の他、学生一人一人に対して特定のチュー

桙済民幬莨莨Ｉ 諏巡鴟覧受〇筒茫祓ぐ席

やスピーキングは強い人が多く、クラスにも積極的に参加しているように見える。英語教育の方法や開始年齢が結果に及ぼす影響の大きさが理論と実際面を通して次第にわかってきた。また授業にはディスカッション形式が多く取り入れられていたので、出身国による考え方の違いが表れてきて日本人のみのクラスにはない面白さがあった。１学期が始まってしばらくした頃、CELTEが主催する留学生対象のIn-Sessional クラスというプログラムが始まった。これは昼休みと夕方の時間帯に設定された１回１時間の自由参加の授業で、無料で受講できるので開講当初はいずれのクラスも大変混み合っていた。集中英語コースの授業のみでも十分な量であるのと内容が専門的になり大学院生の受講が多いので、英語コース受講生向けのクラスは多くはなかったが、私は発音やライティング等、興味のあるいくつかのクラスに参加した。In-Sessionalには通常クラスよりもっと大学らしい雰囲気があり、これらのクラスで英語の発音の鍵や少し上級の英語を学んだり、他学部の友人と知り合う機会を得ることができた。

ウォーリック大学のキャンパスは現代的なイメージでガラス張りの建築物が多いが、メインキャンパスの中心には一際目をひくアートセンターがあり、バスもこのセンターの前から発着する。ロンドン外では最大というアートセンターにはコンサートホール、劇場やシネマ、アートギャラリー、会議場、音楽練習室、レストラン、カフェバー、書店、売店等の設備が揃っており大学内外の人々でいつも賑わっていた。劇やコンサート、音楽のレッスンは日本よりも安い値段で楽しめ、映画も多彩に上映されていたようである。広大な敷地には多くの学生寮、学生会館、コンビニエンスストア、駐車場、体育館、グラウンド、診療所や立派なホテル、いくつもの食堂が点在していて、学生が使える厚生施設やスポーツ、音楽等のプログラムは充実していた。近年英国では国の政策として留学生の受入を拡大しているため、英国中どこでも留学生は多いようだったが、学生総数約18,000人のうち留学生が4,000人以上というウォーリック大学では、キャンパスを歩いていても中国・アジア系、ほか様々な国々からの留学生が占める割合が非常に高いことが実感された。インターナショナルオフィスでは各国別の留学生を対象としたパーティーや、近郊への日帰りツアーを企画したり、留学生のための英国ホームステイ機関への紹介も行っていた。これは英国人ボランティアによって運営されている機関でホストの数が足りないくらい留学生に人気があったようだが、私も運良くクリスマス休暇にスコットランドのお宅へホームステイに招待していただき、ホストファミリーやその友人の方々、ゲストのロシア人留学生とともに現地のクリスマスを体験することができた。

私達東大からの派遣者は、昨年度はメインキャンパスから至近距離にある世帯向けの宿舎へ入居することができた。そこは木立に囲まれた静かな一角で、14戸の煉瓦のコテージが建ち、野鳥やリスが毎日やって来るようなところだった。私達のお向かいは偶然日本人研究者の家族だったが、他のコテージの住人はすべて外国の研究者や大学院生の家族だった。この宿舎はクラスメート達に評判がよく、各国料理を持ち寄ってインターナショナルパーティーを開いたり、キッチンで一緒に料理を作ったりすることができた。学期末などにはクラスのメンバーで町の各国料理のレストランへ出かけることもあった。出発前にはこのような多国的文化圏で生活することになるとは想像し難かったが、現在英国には多くの外国人が居住しており、多民族、多文化な社会へと大きく変化してきている。日本のような単一民族国にいると考えにくいことだが、ロンドンでは街を歩いていて聞こえてくる言語の50

でげ私いユい嶕焚嶕ク髻悃踃嵣w扒这蘊旁縉巛甯璦豅昊滉粤

成でも非常に国際的な環境にあるウォーリック大学の生活を通して、国籍は異なっても人と人との交流には何か共通するものがあるのではないかということと、とはいえ、人々の思考や行動がいかに自国の文化によって強く規定されているかということを強く認識させられた。英国に滞在している間は、日常生活の思わぬところで文化的な違いに遭遇し、西洋と東洋の違い、日本との違いをよく考えていた。英国の大学で学ぶ上で必要とされる基本的な姿勢や考え方は日本とは大きく異なるようであるが、短期間の滞在でそのようなことを深いところまで理解するのはなかなか難しい。英語力が十分でない外国人が異文化の中で暮らしていく上では困難なことも多かったが、物事に対しては常に異なる考え方が存在することを体験的に知ることができたこと、日本に対しても客観的な視点を持てたことは海外生活の大きなメリットだった。授業や宿題でも日本人の考え方や文化について話したり書いたりしなければならないことが多々あり、以前よりも日本文化に対する関心がずっと強くなったことは私に生じた変化の一つである。

研修当初から半年という限られた期間にできるだけ多くのことを吸収して帰りたいと考えていたが、長いようで終わってみるとあっという間に経ってしまった６カ月だった。研修仲間やウォーリックのクラスメート、スタッフの方々に助けられながらできる限りベストを尽くせたことを大変有り難く思う。この研修によって得られた語学力や知識と経験を今後の業務に役立て、還元できるよう努めていきたい。このような貴重な機会を私に与え、研修生活を支えてくださったすべての東大関係者の皆様及びウォーリック大学の皆様に心から感謝している。

CELTEがあるソーシャルサイエンスビルディング

＊なお、文部科学省及び日本学術振興会派遣事業等で現在海外へ派遣されている事務職員は以下のとおりである。（　）内は派遣前所属部局

東郷　太郎（医学部附属病院管理課用度第二掛）
派遣先：カリフォルニア大学サンディエゴ校（米国）
派遣期間：平成15年３月29日～平成16年３月27日
派遣プログラム：東京大学国際交流担当職員在外研修（長期）

古川　稔子（柏地区事務部企画課渉外・広報掛）
派遣先：カリフォルニア大学サンタバーバラ校（米国）
派遣期間：平成15年３月28日～平成16年３月26日
派遣プログラム：東京大学国際交流担当職員在外研修（長期）

能登　亜希子（研究協力部国際交流課）
派遣先：モンタナ州立大学等（米国）
派遣期間：平成15年６月14日～平成16年６月１日
派遣プログラム：文部科学省国際教育交流担当職員長期研修プログラム

細谷　敦子（研究協力部国際交流課）
派遣先：日本学術振興会ロンドン研究連絡センター（英国）
派遣期間：平成15年４月１日～平成16年３月30日
派遣プログラム：日本学術振興会国際学術交流研修

事務職員の海外長期研修プログラムとして以下のものがあるが、詳細については国際交流課に照会されたい。

・東京大学国際交流担当職員在外研修（長期）
・文部科学省国際教育交流担当職員長期研修プログラム
・日本学術振興会国際学術交流研修
・日本学術振興会研究連絡センター事務官派遣
・中国政府奨学金留学生（行政官派遣）
・日墨研修生・学生等交流計画派遣生

（研究協力部）

平成16年度東京大学学術研究奨励資金による国際交流助成事業募集について

下記要項のとおり募集しますので、各事業の提出期限までに所属部局を通じ、研究協力部国際交流課まで提出願います。

なお、申請手続き等詳細につきましては、各部局担当掛へお問い合わせください。

各事業の申請書類は下記のＵＲＬにてダウンロードできます。

http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/kenkyou/kokusai/gakukin.html

１．海外学術交流研究拠点設置・運営経費助成事業
２．東大シンポジウム開催経費助成事業
３．ジョイント・フォーラム開催経費助成事業

平成16年度　学術研究奨励資金による
海外学術交流拠点設置・運営経費助成募集要項

１．趣　旨

国際化の進展に伴い本学における教育・研究の一層

Å髞屢酷罠Ī쉿兎茹褊嚨炒曼孃쌈豬嶢幽彿靖樹艇睟招뺗鼶詻招漉

執行可能なもの）

６．助成額及び採択予定件数

１件の助成額は、200万円程度を限度とし、採択件数は、３件程度を予定している。

７．申請手続及び提出期限

開催責任者は、「平成16年度ジョイント・フォーラム開催経費助成申請書」（別紙様式１）一部を、当該フォーラムの概要（サーキュラー等）の資料があれば添付し、所属部局長を通じて、平成15年９月12日（金）までに総長あて提出すること。なお、各部局内においての提出期限については、各部局事務担当に問い合わせること。

８．選考方法及び採否の通知等

選考は学術研究奨励資金実施委員会が行い、採否の結果は平成15年11月下旬頃までに、開催責任者の部局長あて通知する。

９．報告書の提出

開催責任者は、フォーラム終了後１ヵ月以内に「平成16年度ジョイント・フォーラム実施報告書」一部を、所属部局長を通じ速やかに総長あて提出すること。（様式については採択通知に添付する。）

10．申請書等送付先

研究協力部国際交流課

（研究協力部）

第20回理学系研究科技術シンポジウム

<発表>

EPMAを用いた電子線照射に不安定な試料の微量成分分析技術
吉田英人（地球惑星科学専攻）

稚魚ネットによる相模湾中層生物の採集
関藤　守（附属臨海実験所）

PA（反応粒子磁気分析装置）の移設と制御系改造
山崎則夫（原子核科学研究センター）

植物園における系統保存
小牧義輝（附属植物園本園）

電子顕微鏡について
立川　統（地球惑星科学専攻）

<特別講演>

『金属イオンを並べるための分子デザイン』
塩谷光彦（化学専攻）

日　時：平成15年９月５日（金）13時より
会　場：理学部化学本館講堂（５Ｆ）
　　文京区本郷　７－３－１
主　催：大学院理学系研究科
　　技術部シンポジウム実行委員会
問い合わせ先：TEL.03-5841-4388（櫻井）

（大学院理学系研究科・理学部）

「教養学部報」第467（７月２日）号の発行
――教官による、学生のための学内新聞――

山内　昌之：イラク戦後の自爆テロリズム
油井大三郎：エスカレートする「対テロ戦争」とアメリカ知識人
工藤　和俊：コネチカット大学滞在を終えて
繁桝算男・丹野義彦・大森拓哉：
　　学生相談所が創設50年を迎えました
　　――50年で変わったこと、変わらないこと
安東　克之：救急救命について(2)

〈本の棚〉
渡會　公治：『ジョン・レノン・ナンセンス作品集　らりるれレノン』佐藤良明訳
　　教養の裸理留レレのん
〈時に沿って〉
アルヴィ宮本なほ子：寄り道の果実
石橋　　純：まわり道
〈投書欄〉
三谷　　博：時間割作製に問題あり

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学生課ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。

（大学院総合文化研究科・教養学部）

医科学研究所「オープンキャンパス」開催

医科学研究所では、下記のとおり「オープンキャンパス」を開催いたします。

皆さんのご来場をお待ちしております。

日　時　平成15年8月3日（日）10時～16時30分
場　所　医科学研究所内
　　１号館講堂、近代医科学記念館、白金ホール等
　　港区白金台４－６－１
　　（営団地下鉄南北線・都営地下鉄三田線
　　白金台駅下車）
内　容
・講　演
「動物との共生を考える」
　　甲斐知恵子　　実験動物研究施設教授
「たんぱくしつがおもしろい」
　　大海　　忍　　遺伝子動態分野助教授
・実験の公開（アムジェンホール等）
・資料の公開（歴史資料、標本資料、映像資料）
・施設見学
（ヒトゲノム解析センタースーパーコンピュータ）
○問い合わせ先
医科学研究所管理課庶務掛

TEL：０３－５４４９－５５７２
http://www.ims.u-tokyo.ac.jp/Welcome.html
（医科学研究所）

≪ 事務連絡 ≫

人　事　異　動（教　官）

発令年月日	氏　　名	異動内容（新官職）	旧（現）官職等
		（辞　　職）	
15．6．30	川　島　秀　俊	辞　　職	大学院医学系研究科助教授
		（採　　用）	
15．6．16	平　野　　聡	大学院法学政治学研究科助教授	大学院法学政治学研究科研究生
〃	岡　田　文　雄	大学院工学系研究科助教授	大学院工学系研究科寄付講座教員
		（昇　　任）	
15．6．16	佐　藤　光　三	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科助教授
15．7．1	増　井　良　啓	大学院法学政治学研究科教授	大学院法学政治学研究科附属ビジネスローセンター助教授
〃	玉　置　泰　裕	大学院医学系研究科助教授	医学部講師
〃	原　田　　央	大学院法学政治学研究科助教授	大学院法学政治学研究科講師
〃	吉　田　朋　広	大学院数理科学研究科教授	大学院数理科学研究科助教授
〃	西　山　　真	生物生産工学研究センター教授	生物生産工学研究センター助教授
		（配 置 換）	
15．6．16	重　松　　宏	医学部助教授	大学院医学系研究科外科学専攻臓器病態外科学講座血管外科学分野助教授
〃	白　木　靖　寛	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科附属量子相エレクトロニクス研究センター半導体工学領域教授
〃	市　川　昌　和	大学院工学系研究科附属量子相エレクトロニクス研究センター教授	大学院工学系研究科物理工学専攻物理工学講座半導体ナノ工学領域教授
〃	卜　部　　卓	地震研究所附属火山噴火予知研究推進センター助教授	地震研究所附属地震地殻変動観測センター助教授
15．7．1	班　目　春　樹	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科附属原子力工学研究施設原子炉本部先端原子力安全工学領域教授
〃	寺　井　隆　幸	大学院工学系研究科附属原子力工学研究施設教授	大学院工学系研究科教授
		（併任解除）	
15．6．16	永　井　良　三	医学部附属病院手術部長の併任を解除する	大学院医学系研究科教授
		（併　　任）	
15．6．16	重　松　　宏	医学部附属病院手術部長	医学部助教授
〃	平　井　久　丸	医学部附属病院無菌治療部長	大学院医学系研究科教授
15．7．1	濱　口　桂一郎	大学院法学政治学研究科附属比較法政国際センター教授	厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課主任雇用均等行政監察官
〃	芹　澤　　武	先端科学技術研究センター助教授	鹿児島大学大学院理工学研究科助教授

人　事　異　動（事務官）

発令年月日	氏　　名	異動内容（新官職）	旧（現）官職等
15．7．1	中　野　浩　子	医学部附属病院総務課専門職員	日本学術振興会国際事業部国際研究協力課交流企画第一係長

≪ 訃 報 ≫

金澤　武　名誉教授

本学名誉教授金澤武先生は、平成15年５月26日、ご病気のため、82歳で逝去されました。先生は、東京帝国大学第一工学部船舶工学科を昭和18年９月にご卒業になり、同大学院を経て、昭和20年東京帝国大学第一工学部講師として任官されました。翌21年助教授、昭和31年には弱冠36歳の若さで教授に就任され、工学部応用力学第三講座をご担任になられました。昭和56年に退官されるまで、36年の長きにわたり東京大学にあって、その深い学識と高邁な人格によって、研究と教育に多大な貢献をなされました。東京大学退官後は名誉教授の称号を受けられ、その後も長崎総合科学大学教授、千葉工業大学教授を歴任され、後進の教育を続けられました。

ご研究は応用力学の広範な範囲に及びますが、中でも鋼材の脆性破壊研究の世界的権威として精力的にご活躍されました。とりわけ初期の全溶接船に頻発した脆性破壊事故の解明に関連して、いまでは世界標準となった独創的な二重引張試験法の開発、クラックアレスターの研究、さらに欠陥評価法及び、破壊管理制御システムの開発など、多岐にわたる先端研究の陣頭に立ち、多大な業績を挙げられました。これらの歴史に残る先駆的研究成果は、材料力学、破壊力学、構造工学、溶接工学等の各分野の技術水準の向上に大きく寄与しております。また、造船ばかりでなく、鉄鋼業を中心とする産業の分野に広く適用され、戦後の重工業の復興、成長、安定期に、世界をリードする破壊防止技術によって、先生の研究業績は重工業分野での信頼性、健全性や安全性に多大な貢献をなされました。

学外にあっても、（社）日本造船学会、（社）溶接学会、（社）日本溶接協会、（社）高圧力技術協会、（社）鉄鋼協会、（財）日本海事協会、（財）溶接接合工学振興会において、会長・理事長等の要職を歴任され、産業界を含めて、技術W酡鶺酸舜骫薫碣縑楕洴貳栁倪括譫めて、技術W酡鶺腓竊

（　こ　蓋　뉏　꺧

上　に　台　性　赫　め

駒場と本郷

駒場から本郷に移って4年になる。1990年４月から４年間教養学部情報図形科学教室で助手、その後99年まで助教授、99年から理学系研究科に来た。学生の間は教養学部基礎科学科第二から総合文化研究科に進み、ずっと駒場だったので、都合18年駒場で過ごしてから本郷に「進学」したことになる。

駒場から本郷に来ると、実に様々なことで勝手が違ってとまどう。郵便物の出しかたのような細かなことから、研究費の使い方、教授会の進みかた、およそ思い付く限りのことが違っている。これが同じ大学とはなかなか思えないほどである。

その中でも大きな違いは、やはり講義・会議の数である。具体的な数字は省くが、例えば理学部と教養学部では所属教官の数は２倍も違わない（教養学部のほうが多い）のに、学生は教養課程は3000人、理学部に進学するのは300人で10倍違う。このことが一体どれほどの違いをもたらすかは、なかなかここに書き切れるものではない。が、ここでは、駒場の教官は負担が大きいとか、そういうことを問題にしたいわけではない（もちろん負担は大きいわけだが）。問題は、前期課程の学生に東京大学が提供している教育の質である。教養学部の教官は非常に努力していることはいうまでもない。しかし、学部の４年間を東大で学ぶ学生にとって何が良いかという観点から見た時、前期課程を担当する教官の数と後期課もた桝もるこでかし、学部にとって何ご４じ禝鰌　（旨瞵